

研究発表もうしこみフォーム

氏名：バトエワ・アリョーナ（ジミンゴア）

氏名のローマ字表記：Batueva Aryuna (Jimingoa)

所属：ノタックモンゴル語教室

専門分野：文化人類学

タイトル：シネヘン・ブリヤートと寺院の歴史—ブリヤート僧のライフヒストリーを通じて

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表は、Gelegbalabar lambagaiと呼ばれるブリヤート僧のライフヒストリーをつうじて、シネヘン・ブリヤート人、およびシネヘンの寺院の歴史を捉える試みである。発表内の情報は、トヨタ財団の研究助成（2004年）により実施した調査で得たものである。

氏は、1926年にソビエト領内のアガ草原ゾガーライ郡で生まれ、3歳のときに国境を越えシネヘンへ移住した。移住先は、チベット仏教高僧であった氏の祖父が、十月革命以降激化した宗教迫害から逃れるため、1921年にシネヘンへ移住したさいに得た遊牧地であった。氏は、10歳からシネヘンの寺院に入り、仏教と医学を学んだ。同寺院の僧の多くは、迫害のためにアガから避難してきた人びとであった。同寺院は1928年に寄付によって建立され、最盛期には200人ほどの僧が在籍した大寺院で、1931年には活仏パンチェン・ラマが訪れた。同寺院は、当時シネヘンにおいて医療・教育サービスの機能も担っていた。従来シネヘンでは満洲文字が使用されていたが、同寺院が初めてモンゴル文字教育をおこなったことにより、モンゴル文字が普及した。同寺院は20世紀中頃までは栄えていたが、文化革命により事態が一変した。1966年に寺院は破壊され、僧の多くは粛清された。これを生き延びた氏は、寺院再建のため、パンチェン・ラマに支援を請い、青海の寺院から受け賜った灌頂経典をシネヘンへ持ち帰るなど奔走した。1989年、氏は弟の招待でアガに戻り、ロシア国籍を取得した。その後、ウラン・ウデの科学アカデミーに招聘され研究員となり、ソ連崩壊後のブリヤートにおいてラマの養成に従事した。また、氏はウラン・ウデとモスクワにチベット医学診療所を開き、94歳で亡くなるまで多くの人を治療し続けた。氏は、寺院の歴史とともに生き、他のシネヘン・ブリヤートの人のように、さまざまな地域へ移り暮らしたのである。